

緑地を楽しむ本

『わたしたちのカメムシずかん』

やっかいものが宝ものになった話

たくさんのふしぎ 2016年11月号

鈴木 海花/文 はた こうしろう/絵
福音館書店



ただ「カメムシ」という名の虫はいないのだそうだが、カメムシと聞けば、多くの人は顔をしかめる。それくらい、カメムシのにおいは嫌われている。そんなカメムシを宝ものにしてしまった学校や町がある。この本はそうなった過程をじっくり示してくれる。

舞台は岩手県の葛巻町。人口7,000人くらいの小さな町の小さな小学校。秋が深まると沢山のカメムシが屋内に入ってくるという。この学

校の校長先生は児童に「カメムシ博士」になろうと呼び掛けた。カメムシを見つけたら名前を調べ、写真にとり、標本と一緒に廊下の壁に貼り出した。子どもたちは色々なカメムシがいることに驚き、夢中になる。カメムシを「これはクサギカメムシだね」とか、「カメムシはぼくたちの宝ものだね」などと言うようになった。

見つけたカメムシの図鑑の作成から、葛巻にカメムシ研究者が来るようになり、カメムシへのかかわりはさらに深くなっていく。

カメムシの素敵さの分かる子どもが増えると良いなあ。

(齋藤好子)